

地域文化の現代的文脈

— 遠野市における検証を加えて —

杉 浦 直

はじめに

かつて日本における地域文化を生み出し支えてきた母体は、相対的に孤立した伝統的な地域共同体であった。もちろんそこで外部との接触が全くなかったわけではない。地域から地域へと渡り歩く旅の商人や遊行僧などによって遠い地の知識は伝えられたし、村や地域の知識人たちによって中央の都会で生産された知的情報が持ち込まれ、地域文化の在り方に影響を与えることもあった。また、長い歴史の時間のなかでは、人々の日々の活動において言葉や芸能が口伝えに伝えられ、接触性拡大伝播の形で同一系統のものが全国に広まることも生じ得たのである。しかし、その外部への開放性において、知識や情報が種々のメディアを通して日をおかずに、場合によっては瞬時に広まる今日の状況とは質的・量的に大きく異なることは言うまでもない。昔、シヴェルブシュ (Schivelbusch, W.) は汽車の出現によって旅の状況が一変し、旅行者と風景との関わりが質的に大きく変化した状況を指摘した (シヴェルブシュ、1982、原著1977；吉見、1996、pp.27～28) が、今日ではそれに何十倍する技術的・制度的・思想的・情動的変革が地域文化を生産する母体やそれを取りまく諸状況に生じているのである。この小論は、こうした今日の地域文化を取りまく現代的文脈 (コンテクスト) を、主として日本における地域文化の在り方を検討した文化地理学、文化人類学、民俗学など諸分野の研究成果をレビューしつつ整理・検討し、併せてユニークな地域文化を生産してきた岩手県遠野市の状況からその論点を検証しようとしたものである。本稿は個々の論点について特に新しいことを言おうとするものではない

が、「地域文化のコンテクスト」という視点から既存の論点を配列・整理することにより、今日の文化的状況の本質の一端がより鮮明に浮かび上がることを期待したい。

1. 地域文化をとりまく現代的文脈

地域文化をとりまくコンテクストはもとより諸力の複合・錯綜したコンプレックスであり、単純な整理を許さないが、ここでは互いに関連・重複する1) 観光化と地域の商品化、2) 「まなざし」と地域表象、3) 「文化の真正性」と「伝統の創造」「フォークロリズム」、4) ローカリズムとナショナルリズム、の4つの側面を取り上げることにしよう。

1) 観光化と地域の商品化

今日、観光は世界的に浸透している普遍的な現象であり、欧米・日本などの先進産業化社会のみならず、いわゆる開発途上国の諸地域においても観光化というプロセスの強い影響下にあるところが多い。今日の観光旅行は、移動に苦痛や困難を伴った前近代の「旅 (travel)」とは異なり、大衆が余暇を利用して気楽に参加する大衆観光 (マスツーリズム) の形をとる (以下、森田、2003、p.93、参照)。したがって、その文化的・社会的そして地域的な影響の規模が格段に大きくなるのみならず、その現象自体が社会・文化・地域の大きなシステムと結びついて行われている。そのため、日本などにおける観光の研究は文化研究的な部分を重要な主題の一つとしてもち、また地域における文化の実態の考察においても観光化という文脈を無視して研究を進めることはできなくなっている。観光化が地域文化にどのような影響をもたらすのか、観光化の下で、どのような地域文化の再編が生ずるのか、具体的な事例に即してそのプロセスを実証的に明らかにすることが求められるのである。この点、観光化という文脈において都市の祭礼がどのように変容し再編されたかを盛岡市を事例として実証的に明らかにした安藤直子 (2002)

の研究や、宇和島市を事例として観光化の下で闘牛という伝統行事の組織が
いかにそれに対処し新たな関係を再生産してきたかを論じた石川菜央(2004)
の論文などが、最近の代表的な収穫として特筆されよう。

観光化という文脈の下でまず問題となるのは、「文化の商品化」であろう。
商品化されるものは、個々の地域文化の要素だけではない。実は、地域その
ものが商品化されていくことにまず留意しなければならない。ここでは「観
光」も「商品化」も従来よりは広い概念として捉え直される。観光は単に
人々が観光地に出かけ見物する行為のみではなく、そこにおけるゲスト（観
光客）とホスト（観光地の業者や地元住民）との関係を中心とする社会関係
とコミュニケーションの総体として捉えられなければならないし、商品化は
単に貨幣との交換価値を獲得することのみならず、観光において人々による
幅広い選択と行動の対象となること自体として捉えられる。成瀬厚（1993）
は、東京の一地区「代官山」のイメージ（ステレオタイプ）形成を論じた論
文のなかで、「場所の商品化」を情報メディアによる地名のブランド化、マ
ス・アイデンティティの確立として捉え、「場所」は人々のコミュニケーション
のなかで選択され、「消費」されるものとしている。こうした言い方に従
えば、観光化のなかで確固としたイメージを与えられ人々の選択の対象とな
る地域（観光地）はまさに「商品化」されていることになる。地域自体が商
品化されるなかであって、地域の文化の諸要素も商品化される。文化要素は
メディアによってブランド化し、人々の選択の対象となり、現実に貨幣と交
換されて消費される。全国いたるところの地域で多かれ少なかれこうした過
程が進行しているのである。

このように観光化は現代における地域文化をとりまく文脈として大きな意
義をもつが、「観光」という現象を実体あるものとして一枚岩で捉えたり、
その影響を普遍的なものとして単純化することには慎重でなければならない。
観光化のもつ意義は地域の条件や地域文化を支える人々の主体性によっ
て質的・量的に大きく異なり得るのであり、現代地域文化の考察や評価にあ
たってはその性質を短絡的に観光化に還元することを避けねばならない。

2) 「まなざし」と地域表象

地域文化に観光化の影響が強まり、地域文化の要素が商品化されていくということは、地域文化が広範な人々の目にさらされ、人々の期待の下で存在しなければならないということでもある。観光客が日常の世界から離れて観光地で見える風景や町並みなどへ投げかける視線は、ジョン・アーリ (Urry, J.) によって「観光のまなざし(the tourist gaze)」として概念化された (アーリ、1995、原著1990)。「まなざし」という概念は、もともとミッシェル・フーコーの「医学のまなざし」(仏語のregard) という概念からヒントを得たもので、社会的に構造化され組織化された見方を意味するが、「医学のまなざし」のように制度によって支えられ正当化された専門家のまなざしとは異なり、集団によっても時代によっても多様なものとして想定されている (アーリ、1995、p.2)。この「まなざし」とよく使用されるキーワードである「地域イメージ」との関係は難しいが、一応両者は主体と対象との両極にあって対応し、前者は対象に向かう主体の側にあり後者は対象それ自体に付与されるものとして概念化されていると捉えておこう。

こうしたアーリの「まなざし」論が日本における観光や地域文化の研究にも大きな影響を与えたことは確かではあるが、意外にも「まなざし」を直接のキーワードとし、その社会的構造化・組織化過程を本格的に分析した当該分野の研究は少ないように思われる。むしろ、「まなざし」は観光客や地域の外部の人々のある種の特殊な見方、期待として所与の条件とされ、それがあることを前提として地域文化の変容や創造が語られることが多い。例えば、山下晋司 (1999) のバリ島の文化生成や変容を観光人類学的視点を重視して論じた研究においても、一貫して外部の人々のまなざしの存在は重視され、序論的な部分においても1章を割いて「観光のまなざし—その時間と空間」が語られるが、「まなざし」概念自体については「風景に対する独特な切り取り方」として紹介され、その成立を前述のシヴェルブシュの車窓から見るパノラマ的風景やマッカネルの「観光の枠付け」と関連づけている (pp.23 - 24) のみで、その性質や生成過程を意識的には論じていないように思われる。

この人々の「まなざし」が地域についての具体的な表現の形になって現れたものが地域表象である。表象とは難しい言葉であるが、その原語である representation という言葉が指し示すように、ある事物や事象を言語などの記号表現によって現前にあるかのように表す（再現前化する）、あるいはその記号表現がその事物・事象を代表するよう仕向けるのが表象（表象行為）である、と言ったところだろうか。より簡単には、何かを語る行為が表象（表象行為）であり、その語りの所産（生み出された記号）も「表象」と呼ばれるようである。この表象と言説（discourse）は似ているが、太田好信（1990）は学問として組織された語りを「言説」、学問としてではなく「様々なメディアを通して自己や他者を語る行為」を「表象行為」と呼び、区別している（p.106）。この表象行為が地域や地域を構成する要素に向けられたとき、「地域表象」となる。「まなざし」や「地域イメージ」との関係で言うと、特定のまなざしをもった地域表象が積み重ねられると地域イメージの生成・定着・強化を生み出すが、固定した地域イメージはまなざしと地域表象の再生産につながると言える。また、地域文化との関係では、まなざしを通して生産された地域表象が地域文化の在り方に直接・間接の影響を与え、地域文化生産の文脈の一つを構成するのである。

地域表象を地域文化生産、さらには地域そのものの生産の重要な契機として、表象の在り方や内容を分析した研究は多い。例えば文化人類学者の太田（1990）は前述の言説と表象の違いを指摘した論考において、「沖縄はいかに語られてきたか」という問題意識の下に、1）日本民俗学は沖縄の「他者性」をどう語ったか、2）マスメディアが観光という商業行為のなかでどう表象したか、3）沖縄の人々がそれに対抗して自己をどう表象したか、という3点を記述・分析している。大城直樹（1998）は同じく沖縄を取り上げ、この地域をめぐる生産・再生産される地域表象の現実やそこでの力関係を検討し、特にそれらが「沖縄らしさ」の専制（押し付け）につながる側面を批判的に論評した。また、小島邦江（2003）は、昭和前期の民芸運動の展開を背景に郷土という枠組みのなかで日常使われてきた焼き物がどのように記述（表象）されてきたかをその背景とともに論じている。地域表象が地域その

ものを創出するという観点からは、地理学者の論考が目立つ。例えば、前述の成瀬（1993）は東京の一地区「代官山」が現在のように人々にとって特有の価値のあるファッション性の高い街として姿を現す過程を検討し、そこに大衆雑誌などの文化的情報メディアが発信する地域表象が主導的な役割を果たしたことを具体的に明らかにした。また、内田順文（1989）は、より長期的な視点から高級避暑地・別荘地としての軽井沢の形成過程を、文学作品や大衆雑誌における地域表象の産物として描き出している。なお、瀬川真平（1995）のインドネシアの公園－博物館コンプレックス「うつくしいインドネシア・ミニ公園」が描き出す国民国家の形を読み解いた論文はここでの論点を大きくはみだす性格をもつが、公園－博物館という建造された景観を利用した地域表象が国民国家とそれを構成する地方の文化の在り方を規定・創出している状況を捉えた論考と読むこともできよう。

このように現在の地域文化は、その外部からの過剰なまでの地域表象の対象とされ、その下での特有なまなざしにさらされつつ、自己を生産・再生産していく存在であるという側面を強く有しているのである。

3) 「文化の真正性」と「創られた伝統」「フォークロリズム」

地域文化に対する人々のまなざしと地域表象によるその変容は、文化に期待されるもう一つの役割である伝統の保持、文化的正当性の確立と維持という側面と鋭く対立する。このことに関連して提起された一連の論争が「文化の真正性（オーセンティシティ、authenticity）」をめぐるさまざまな議論である。

文化の真正性に関する論議は、まず観光研究において、観光客は何を求めて旅に出るか、すなわち観光のまなざしの性質をめぐってブーアスティン(D. Boorstin)やマッカネル(D. MacCannell)により提起された¹⁾。周知のようにブーアスティンは、その著書『幻影の時代—マスコミが製造する事実—』(1964、原著1962)のなかで、現代においては我々(アメリカ人)が経験することのほとんどが合成的で新奇な「擬似イベント(pseudo-events)」であるとし、観光現象にその好例を求める。ここで擬似イベントとは自然発生的

でなく誰かがたくらみ扇動した出来事であり、本来メディアにより報道され再現されるという目的のため仕組まれたものであるとされる。彼は「旅行」体験、特に外国旅行体験、の歴史的変容を振り返り、かつての経済的負担と不便・困難に満ちたエリート層の外国旅行が出会いや冒険、驚きをもたらした時代から、今や鉄道や汽船の発達、旅行業の整備が一つの活動としての「旅」から大衆が購入する商品としての「観光旅行」に転換させ、旅の体験、すなわち目的地に行くまでの経験、そこでの滞在の経験、そこから持ち帰ってくるもの、を大きく質的に変えたことを指摘した。現代の観光旅行者（ツーリスト）は、商品としての旅行に「世界が本来提供してくれる以上のめずらしいものと、見なれたものとを同時に期待するようになった」（pp.91-92）。こうした期待が、「全世界が擬似イベントのための舞台になることを要求している」（p.92）という。すなわち、現代の（アメリカ人）観光客のまなざしは真正の文化ではなく擬似的な出来事に向けられている。この見方に従えば、現代の地域文化は圧倒的な観光化の文脈において真正さ（オーセンティシティ）を維持できず、擬似的なイベントの集合として再編成されていくことになる。

しかし、こうしたブーアスティンの「観光のまなざし」の捉え方に、マッカネルは疑問を呈する（MacCannell, 1973）。彼はブーアスティンを観光研究の先駆者として挙げ、倫理的にすぐれた古典的立場と評価する一方、科学的な観光研究に至る道ではないと批判し、観光旅行と宗教的巡礼の動機の類似性を指摘しつつ、観光者も「真に生きられたものとしての生活を見る欲求によって動機づけられている」（p.592）と考えた。しかし、こうした真正の（オーセンティックな）体験を求める観光客も、その体験が実際に真正であるかどうかを確信することはしばしば非常に難しい（p.597）。その状況を分析するため、マッカネルはゴッフマン（E. Goffman）の「表域(front region)」と「裏域(back region)」の概念を観光状況に導入する。ここで、「表」とはホストとゲストあるいは売り手と消費者が直接に会う場所であり、「裏」は公演の間ホームチームのメンバーが休息や準備のため引っ込んでいる場所、住宅に例えれば前者は接客オフィスや客間、後者は台所や洗濯場である。観

光客（ゲスト）が観光に行って最初に出会うのは表域での地元住民・業者（ホスト）による演出であるが、それだけでは観光客は満足しない。実際の生活、真正な文化は裏域にある。しかし、産業社会の構造的発展は、観光者が活動する空間を飛躍的に拡大し、新たな「観光状況（tourist setting）」を創出した。そこでは、ゴッフマンの言う表域から裏域までの間に、観光客が本物に触れたと感ずることができる観光用の空間、すなわち裏域に見えるよう組織されている表域や一部の人のみが入れる裏域など中間的な領域が生成していると論じた。この見方からは、現代の地域文化が文化の真正性に関して表から裏まで連続して変化する複雑な文脈の下に置かれていることが示唆される。

このようにマッカネルの研究は観光状況の分析に新たな展開をもたらしたが、ブーアスティンと同様、究極的な「文化の真正性」が少なくとも裏域においてはアプリアリに存在すると仮定しているように見える。しかし、少し考えて見ても「本物の文化」とは何かを決めることはそんなに簡単な問題ではない。ある絵画が「本物」であるかどうかを論ずるときは、ほとんどの場合、「Aの絵」として流通している絵画が本当にAなる画家によって描かれているかというレベルの問題につきる。しかし、その絵がある時代の様式を忠実に再現しているかとか真に感動を与えるかどうかという基準で論ずることも可能なはずである。この基準という点に関しては、岩本通弥（2003、p.175）が挙げた佐渡相川の奉行所跡保存事業のエピソードが興味深い。当地で2001年に復原された奉行所御役所の公開にあたって「国史跡に佐渡奉行所 復元しました 本物です」の看板が立てられたという。この場合「本物です」とは「鉄筋やコンクリートなど現代工法に依らず、当時の建築技法や様式に従って木造で再現された」ことを指している。すなわち、その基準に従えば「本物です」ということになる。このように、ある基準、ある文脈に従って「真正性」が議論される。その文脈を離れてアプリアリに真正なものなどないはずである。コーヘン（E. Cohen）は、観光研究における「真正性（authenticity）」概念の使用における困難性を、本来哲学的な概念であるこの言葉を無批判に社会科学に導入したことに求めている。コーヘンによれば

「真正性」は社会的に構築された概念であり、したがってその社会的意味は所与ではなく「交渉的」であることになる (Cohen, 1988, p.374)。

日本における「文化の真正性」についての主要な論議は、このコーヘンの主張の延長上になされているように見える。この概念との関連で観光化の下における地域文化の在り方についての議論を日本の文化人類学的観光研究において積極的に展開した太田好信は、「何をもって文化とするか」「誰にそれを語る資格があるか」という疑問に答える概念として「文化の客体化」という概念を提唱した (太田, 1993, p.391)。ここで文化の客体化とは、他者に自己の文化を提示するため、その要素を選択しつつ操作できる対象として新たに作り上げることである。その結果選ばとられた文化要素は過去から存続してきた要素であっても、客体化のため選ばとられているため、伝統的な文脈の下での意味と同じではない。そのような文化要素は、従来の文化人類学的研究の記述、すなわち民族誌から「真正」ではないとして除外される傾向にあった。しかし、太田によれば真正であるかそうでないかを決定する判断は現在生きている人に委ねられるという。すなわち実体として「真正な文化」があるわけではなく、つねに現在のある価値体系によって解釈された結果、文化は「真正さ」を獲得する。つまりコーヘン流に言えば、「真正さ」は社会的に構築されることになる。こうした太田の構築主義的・非本質主義的見解は、その後の日本における観光文化研究に一定の主導的な影響を与えたと判断される。例えば、福田珠己 (1996) は文化遺産や文化財の「真正性」概念との対比で、ベルガー (P.L. Berger) やコーヘンを引きつつ「真正性」が生来のものではなく交渉によって生じる近代的概念であることを前提に実証的事例の解釈を進めた。また、岩手県盛岡市の2つの祭 (「チャグチャグ馬コ」と「さんさ踊り」) を事例として、祭が「伝統」保持と観光化という対立する文脈において変化していくプロセスを論じた安藤 (2001) は、観光研究におけるオーセンティシティ概念の主要論点を踏まえつつ、祭に携わる人々 (つまりホスト) が自己の多様な位置づけを行いながら、オーセンティシティを追求している状況を詳細に明らかにした。ここにおけるオーセンティシティは、ホストによって地元内部での権力追求と重なりつつ主体的に主

張されるものとして捉えられており、まさに社会的に構築されたものと言える。現代の地域文化は、ゲストのみによってではなくホストをも含めて多様な「真正性」の構築が実践される状況下で生成するのである。

このような「文化の真正性」についての論議は、現代の観光化の下における文化研究においてよく引き合いに出されるもう一つの論点「創られた伝統」にも深く関係する。周知のように「創られた伝統 (the invention of tradition)」は、イギリスの歴史学者ホブズボウム (E. Hobsbawm) とレンジャー (T. Ranger) によって1983年に提唱されて以来、多くの論議を呼んだ。彼らの言う「創られた伝統」とは、文字通り実際に創り出され、構築され、形式的に制度化された「伝統」であり、具体的に辿ることは出来なくとも急速に確立された「伝統」のことである (以下、ホブズボウム/レンジャー、1992、p.10)。創られた伝統は、「反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質」であるが、歴史的な過去との連続性がおおかた架空のものであるという点にその特殊性がある。考えてみれば、伝統的とされる多くのものが、案外最近になって創り出されたものであったり、あるいは昔のものとは大きく異なるものであったりすることは我々もよく知っており、彼らの論議が構築主義的な見解が広まった現在の文化研究において広く受け入れられたのは驚くべきことではない²⁾。

この「創られた伝統」の存在を文化地理学的研究において例証した好例が、福田 (1996) による八重山諸島竹富島の町並み保存運動についての論文である。竹富島は多くの観光客を迎える観光の島であり、赤瓦葺漆喰塗りの「伝統的」町並みが観光客を惹きつける重要なポイントとなっている (以下、福田、1996)。この町並みは重要伝統的建造物群保存地区に指定され、観光案内書にも「古き良き沖縄の町並み風景がそのまま残っているところ」と謳われている。しかし、この赤瓦屋の出現はそんなに古いことではない。実際に島内に普及し始めたのは大正期以降であり、島の近代社会への移行と富の象徴として富裕層の家に採用されていき、1970年代後半からの町並み保存運動のなかで強調され、増加していったのである。すなわち、現在町並み保存運

動のなかで守られ、目指されている赤瓦屋が大部分の町並みは、過去にあった姿ではなく「富の象徴としての瓦屋が並ぶ幻の姿」(p.734)であるという。一方、こうした赤瓦屋の歴史そのものは、観光ガイド、観光での解説、島内の案内版などで、一切触れられていないという。すなわち、竹富島をめぐる地域表象から完全に排除されているのである。現代の地域文化のなかで「伝統文化」と称されるものが情報の選択、強調、排除という過程を経て生成することを、この福田論文から学ぶことができる。

この「創られた伝統」の概念は、近年の地域文化、特に民俗文化を取り巻く状況として注目されているフォークロリズムの視点とも重なる。「フォークロリズム」は、もともとドイツの民俗学において1960年代から取り入れられた概念で、その定義はさまざまであるが、いずれにしても民俗文化がいろいろな形で本来の文脈とは異なるところに適用されたり、新しい形で再生したり、本当は新しいのに古い民俗のように思われているものが生成したりする状況を指している。フォークロリズムと「創られた伝統」とは、共に新たな形や意味をもった地域文化が生成することを想定しているが、後者はそれが帰属意識や権威などの確立や正当化を促すものとなる(ホブズボウム/レンジャー、1992、p.20)ことを前提としているので、新たな形が次々と現れる現代の地域文化状況を説明する操作概念としては、フォークロリズムの方が適用範囲が広いと言えよう。

近年の日本の地域文化の研究において、フォークロリズム的状况を扱った論文は多い。文化地理学と民俗学の境界領域を積極的に開拓している八木康幸(1994)は現代の地域文化を取り巻く状況を「フォークロリズムの時代」と捉え、近年日本の各地で盛んになっている和太鼓芸能集団の生成過程を長崎県をフィールドとして明らかにし、それがあたかも伝統的な民俗芸能であるかのように言説が構成され、「ふるさと」や「郷土」といった意味が獲得されていく現象を指摘した。やはり民俗学にも目配りをする文化地理学者内田忠賢(2001/2002)は、民俗は変化するとの前提に立ち、①民俗はお祭りの日が休日になるなどあっさり変化する場合、②民話の公演のように民俗を変えないように保存・維持する場合でも、もとの文脈とは違ったところで生

きるためその意味も変わってしまう場合、そして③昔はなかった民俗が創り出される場合、の3つのケースを指摘し、3番目の現象を「伝統の発見・創造、フォークロリズム」であるとした³⁾。そして現代の民俗学においてこの3番目の現象の研究も重要であるとし、高知で生まれ全国に拡散した新しい祭り「よさこい祭り」の地域文化としての意味を多角的に考察している（ほかに内田、1992；1994；1999）。特筆すべきは、日本民俗学会の会誌『日本民俗学』236号（2003）が、特集「フォークロリズム」を組み、この概念の意味を問うとともに、現代日本におけるフォークロリズムの諸相を、具体的な事例を中心として照射することを試みていることであろう。ここで提示された事例は、食文化（節分の巻ずし）、伝説、郷土玩具、葬儀など個別の文化要素から民芸、文化産業、博物館展示などやや複合的な文化領域に及び、現代日本の地域文化において観光化やマスメディアによる表象と絡みつつ民俗文化要素がさまざまな形で「流用」されていることが示される。すなわち、フォークロリズムに傾斜しやすい風土・文脈（同上特集、p.2）が形成されているのである。

4) ローカリズムとナショナリズム

最後に、上で述べてきたような現代日本の地域文化を取り巻く文脈を、イデオロギーのレベルにおいて捉え直してみよう。産業化による消費物資の全国的な浸透やマスメディアによる均質な情報生産に抗して、今日の地域文化の文脈に見られる一つの特色は、地方的なもの、地域独自のものの強調、すなわちローカリズムであろう。現代の多様化した観光客が求めるものは、ブーアスティンが強調するような明らかな擬似イベントのみではない。多くの観光客が、それが相対的に伝統的なものであれ新たに演出されたものであれ、せっかく出かけてきた観光地においてはその地域でしか味わえないと思われる地方的な文化に触れることを一つの楽しみにしていることは疑い得ない。圧倒的な観光化という文脈の下では、観光客を迎えるホスト側が地域独自のお祭や食文化、すなわちローカルな特色を観光振興の戦略として強調することは必然的なりゆきであろう。もっともこのような「地域の独自文化」の

強調は、必ずしも観光客を意識してのみ生ずるのではない。地域に生きる人々自身が、長期的な衰退や外的・内的な危機に直面して自らを奮い立たせ、集団的なアイデンティティの再生を図る手段としても利用される。今、高橋順一（1987）が報告した和歌山県太地町の「鯨の町擁護運動」の例を見よう。太地は、1960年代前半までは日本有数の捕鯨船乗組員の供給地、鯨の加工基地であったが、1970年代からの国際的な捕鯨への圧力下で捕鯨産業が急速に落ち込み、経済的な基盤を大きく損ねた。しかし、町には今でも鯨に対するポジティブなイメージが強く残り、また60年代後半以降創造してきたさまざまな鯨をモチーフとしたシンボル群に溢れている。そこで強調されるのは、太地が日本における古式捕鯨の発祥の地であり、太地人は昔から鯨と特別な関係を結んできたという「鯨と共に生きる町」イディオムである。言わば、ほかの町にはない太地文化の独自性の強調であり、強いローカリズムの主張であったと理解される。しかし、このため太地はある程度の観光地として知られるようにはなったものの、それが外部の人や観光客向けに演出された独自性と捉えてはおそらく間違いであろう。高橋（1987）の記述による限り、「鯨の町擁護運動」というローカリズム戦略は、第一義的には捕鯨産業の切り詰めや町村合併圧力によるコミュニティ境界消失の危機といったストレスへの防衛的反応であり、アイデンティティ回復への投資であったと解釈される。現代社会におけるローカリズムは、観光のまなざしの下での必然的な戦略であると同時に、そのまなざしの押し付けや外部システムの暴力的介入に抗する地方の人々の主体的な実践でもあったという両義的な側面を有するのである。

興味深いことにこうしたローカリズム発揮の主体は、昔からの伝統的共同体ではなく、町村合併を経て比較的新しく成立した自治体であることが多い。八木（1994）が報告する長崎県の創作太鼓の場合、長崎「旅」博覧会（1990年8月）におけるその参加団体の自己表象においては、ふるさとの自然や歴史、古くからの生業の特色など「あふれるばかりの言説で土地との絆を説き、正統性を主張している」が、太鼓の創設自体が町の地域活性化事業や商工会の振興事業として企画される例も多く、町を代表する郷土芸能として認識さ

れているという。つまり、地域文化は常にどの町のそれであるかが不可欠の情報として扱われ、その所属する行政単位とともに明らかにされるのである。今のところ十分に明示的な指摘例をほかに挙げ得ないが、現代の日本においては文化運動への行政の主導性が強く、地域文化発信のローカルな単位が市町村という行政単位に収束しがちな状況は否定し難い傾向と思われる⁴⁾。

ここでさらに重要なことは、この日本の現在の地域文化に見られるローカリズムへの傾斜が、それ単独で発露しているのではなく、多くの場合ナショナルな動きに絡めとられたり、ナショナルなものとの接合（節合）したりして生成していることである。清水市におけるサッカーの普及過程を論じた金明美の論文（2004）は、この状況を直視して考察した一つの典型例であろう。清水市では1960年代以降、「サッカーの町」としてのイメージを全面的に押し出した地域振興戦略がとられ、サッカーによるローカル・アイデンティティの刻印・凝集がなされた。金はその背景に「文武両道」という戦前から戦後に受け継がれた根強い（ナショナルな）教育言説がサッカーに結び付けられ、地域の人々の民衆の世界観が「正統的な」学校文化に包摂された過程を見る。すなわち、「ナショナリズムとローカリズムの相互浸透に『ローカルな』人々の生活世界の生成維持が表象され」（p.227）ているのである。ローカルなものがナショナルなものに収斂する状況は、国立公園制度を事例として近代日本の国土生産過程を論じた荒山正彦（1995）の論考にも垣間見える。日本の国立公園制度は、大正期にその想が練られ、昭和6（1931）年の国立公園法によって確立した。国立公園設置の要件には土地所有や各種産業との関係など種々の条件が要求されたが、いずれにしても「日本を代表する自然の風景地」であることが絶対的な要件とされ、加えて「国民がそれを体験し得ること」が不可欠であった。具体的な国立公園の選定に当たっては全国各地から建議と請願が帝国議会に提出されたが、興味深いことはその建議・請願において各地方の風景地がいかに国立公園の理念に合致した場所であるか、すなわち日本を代表する風景地であるかが主張されていたことである。各地における風景への審美的な評価は近代以前から存在し、その価値を国家に認めさせようとする願いは、ようやく視野に入ってきた観光現象との絡み

があったにせよ、より素朴なローカリズムの発露とも捉えられよう。しかし、重要なことは近代国家の制度と結びつけられてそれが主張されたことで、荒山が言うように「国立公園という近代的な制度が、ローカルなものをナショナルな風景地に規律する1つの契機となった」(p.804)のである。また、昭和初期の民芸運動を背景とした郷土の陶芸についての表象を扱った小嶋(2003、p.64)も、その動きが「ナショナル・アイデンティティや伝統への問い直しと表裏一体にあるローカルなレベルでのアイデンティティや伝統の問い直し」の動きであり、「郷土が強調される時、その郷土は祖国という共通の基盤を前提とし、愛国の精神と郷土愛が同じ次元」に置かれることを指摘している。このようにローカリズムのナショナリズムへの包摂はすでに近代日本において始まっていたことを、荒山論文や小嶋論文は教えてくれる。近代後期以降の国民国家にあってはナショナリズムが強まり、本来ローカルな地域文化もその価値をナショナルなそれに収斂させる、あるいは少なくともそれに強く抗さない形の語りで自己を表象せざるを得ない状況が出現していると言える⁵⁾。

2. 岩手県遠野市における地域文化の現状とその文脈

以上、現代日本における地域文化を取りまくコンテクストを論じてきたが、ここでは、きわめて特色ある街づくりを進めてきた地方都市であり、独特な自己表象によって街のイメージを形成してきた岩手県遠野市を取り上げて、上述の論点を検証することを試みよう⁶⁾。

遠野市は、岩手県中南部、北上山地内の盆地(遠野盆地)を中心にした地方都市で、1954(昭和29)年、遠野町と小友、綾織、松崎、附馬牛、土淵、青笹、上郷の7村が合併して市制を施行した。さらに、2005(平成17)年10月、宮守村と合併して現在に至っている。旧遠野町の市街地の起源は中世城下町に遡り、約800年前には山城が築かれていたが、城下町として本格的に町割りとなされたのは八戸氏(後の遠野南部氏)の入部以降であるので、む

しろ近世城下町の性格が強かったと見てよい（小杉、1978、p.91）。人口は1970年代まで3万人台を保っていたが、減少傾向に歯止めがかからず、1995年には2万8千人強に下がった。

今日の遠野市の産業基盤は農林業のほかに観光業によって支えられている部分が多い。遠野市の観光化は、「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンが始まった1970年代から本格化し、観光客の入込み数も1990年代には年間50～60万人に及び、県内でも有数の観光地の一つとなっている⁷⁾。この観光化を招来し支えているものは、遠野市の積極的な観光施設建設への投資である。1980年には「遠野市立博物館」、1981年「たかむろ水光園」（入浴・宿泊施設）、1984年「伝承園」（野外博物館・民俗資料館）、1986年「とおの昔話村」、1996年「遠野ふるさと村」（グリーン・ツーリズム施設）、1998年「遠野風の丘」（1999年道の駅認定）、2002年遠野城下町資料館など次々に観光用の施設が開設された（川森、2003、p.103）。人口3万人程度の地方都市としてはまさに破格の観光開発と言ってよい。こうした観光化という文脈の下に、遠野という地域は全国の人々に知られ、その観光行動の選択の対象となってきた。すなわち、遠野は商品化されてきたのである。

では、遠野に来る人々は何を求めてこの北東北の田園都市にやって来るのであろうか。遠野にどのようなまなざしを注いでいるのであろうか。遠野には、城や寺院など文化財として顕彰される特別な歴史的観光資源は特にない。しいて言えば、鍋倉城址や道路割に僅かに残る城下町の面影、それに周辺農村部の南部曲家などであるが、前者は観光対象としてあまり強調されることはなく、後者は移築保存されているものを除いて極端に少なくなった。遠野市の観光資源は、圧倒的にここ20年くらいの間に創り出された言わば人工的な構築物に頼っているのである。しかし、遠野のイメージは、むしろ古い「自分たちの身の回りでは失われてしまった『ふるさと』のイメージ」（川森、2003、p.104）で満ちている。このイメージを創り出しているのが、遠野についての異例とも言える豊富な地域表象である。

遠野について大衆雑誌など文化情報メディアにおける記事が増えだしたのは、1970年秋の国鉄による「ディスカバー・ジャパン」キャンペーン以降で

あったことは衆目の一致するところであろう。遠野についての雑誌などマスメディアにおける記事を「大宅壮一文庫雑誌記事目録」などから詳しく検討した鎌田聖美（2004）によれば、1970年以前の遠野についての数少ない地域表象は馬産地や内陸と海岸の中継地としての機能を中心としたものであったという。しかし、70年以降の地域表象のキーワードは「民話のふるさと」を強調したものに変わっていく。その軸にあるものが柳田国男著『遠野物語』であることは言うまでもない。この1910年に初版が出版された民俗誌と文学作品が結合したような稀有の書は、1960年代、70年代になってから吉本隆明、三島由紀夫、小林秀雄、鶴見和子などにより論評・評価され、広く一般読者をも獲得してゆく（鎌田、2004、p.25）。この『遠野物語』が喚起したイメージと「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンによって生み出された「ふるさと」へのまなざしが結びついて（川森、1996、p.152）、遠野についてのきわめて特徴的な地域表象が次々に生産されていくことになったと言える。

重要なことは、こうした外部からのまなざしと地域表象に応じて、遠野自身が自らを「民話のふるさと」として表象し、それにふさわしい内実をもつものとなるべく空間と文化を再編成していったことである。先に述べたさまざまな観光施設においてもこうした方向性は明瞭である。例えば、1984年開館の遠野市立博物館では、通常の事物展示より民話の世界の視覚化を意図した表象的展示が多い。また、柳田国男との絡みで、遠野が日本民俗学「発祥の地」であることも強調される。「とおの昔話村」では、柳田の泊まった旅館を移築した「柳翁宿」があり、隣接した物産館の2階の「語りべホール」では地元の古老によって民話（昔話）が語られ、若い観光客を惹きつけている。また、街並みの整備においても『遠野物語』に沿った表現が行われる。例えば、遠野駅に降りると向かいのロータリーには「遠野物語碑」が立ち、左手には「カッパの伝助」の彫刻が人々を出迎える（太田、1993、p.392）。このように、我々が実際遠野を訪れると、おびただしい『遠野物語』そして民話のイメージを表象する事物に出会うのである。もっとも、遠野における施設や造形のすべてが『遠野物語』に直接的に繋がるわけではない。そこでは、伝統的な民家（曲家）、昔から伝えられた生活文化や生業文化、城下遠

野の伝統的町並み、そして遠野の豊かな自然などもテーマになる。しかし、全体として、ここでも昔から変わらないもの、他の地域ではもうなくなってしまった懐かしいものが強調されている。つまり、遠野における街づくりと現在の地域文化の姿は、『遠野物語』と民話を核とし、それを昔から変わらぬ古く懐かしい事物が取り巻いて、一つの小宇宙を成すよう構成されているのである。

では、こうした現在の遠野における地域文化は、「文化の真正性」という観点からはどのように評価できるのであろうか。観光客のまなざしを受け止めるほとんどの施設は1980年代から整備されたものであり、それ自体はまさに現代的な文化装置である。しかし、そのなかで展示され演じられる文化は伝統的であり、民俗的であるものが多い。遠野市の観光政策の新しい動向、グリーンツーリズムの中核になる施設である「遠野ふるさと村」では、縄ない、馬っこ作り、竹とんぼ作り、絵馬絵付け、草木染め、陶器作り、もちつき、そばうちなどの体験プログラムを用意している（川森、2003、p.105）。これらは昔ながらの生活文化の一部ではあるが、所詮観光施設の体験プログラムである限り、「本物の（オーセンティックな）」生きた生活体験とは言い得ない。これらは、本来の民俗文化的な要素を観光という異なる文脈に流用する行為であり、その意味でフォークロリズムと捉えてよい。「とおの昔話村」の「語りべホール」における民話の公演はどうであろうか。地元の練達した古老による伝統的な遠野弁で語られる民話は、観光客に深い印象を与える。人々は自分たちの身の回りにはない生きた本物の伝承に触れたという実感を、川森博司のインタビューに答えて口々に表明する（川森、1996、pp.153-155）。しかし、もちろんマッカネルの言う「表域」であるところのホールで語られる昔話が本来の意味でのオーセンティックな文化であるわけではない。例え、話そのものが昔のままのものであったとしても、語られる文脈はすでに失われている。しかも、昔話は固定したテキストがあるわけではないので、どれが正統的な話かを決めることはできない。川森（1996）によれば、遠野の「語りべホール」で現在話されている昔話は、柳田の『遠野物語』の筋書きに従いつつも、語り手たちによって思い出され、「土地ことば」

で入念に仕上げられたものであるという。民俗文化の要素が現在に蘇り、新たな生命をもつ現象、これもフォークロリズムとして解釈できよう。遠野の地域文化においては、「創られた伝統」にまで規範化するものは少ないにせよ、多様で豊かなフォークロリズムへの傾斜が随所に見られるのである。

こうした遠野の地域文化の在り方を支え、かつそこに表明されているイデオロギーは、どのように捉えられるべきであろうか。上に見てきたように遠野のさまざまな観光施設における表象でまず強調されるのは、『遠野物語』と民話であり、遠野でこそその民話が生きて残っているのだという主張であろう。そしてそれは、柳田国男が『遠野物語』を書き遠野を訪れたからこそ、遠野は日本における民俗学発祥の地であるというイディオムと結びつく。つまり遠野は日本のなかでかけがえのない位置づけをもつ特別な町として表象される。これは一種のローカリズムの発露と言ってよいであろう。もっとも遠野のすべての施設が『遠野物語』を強調しているわけではない。「遠野ふるさと村」や道の駅「遠野風の丘」ではむしろ伝統的な生活文化体験や産地直売の物産などグリーン・ツーリズム的要素が強い（川森、2003）。しかし、それも遠野であればこそそれらを豊富に体験し得るというローカリズム的主張と捉えることもできよう。つまり、現在の遠野の地域文化の背景には色濃いローカリズムの影が認められる。

しかしながら、このローカリズムは容易により広い広域的なもの、一般的なもの、さらにはナショナルなものに転換されやすいことに注意しなければならない。考えてみれば、民話は遠野にのみ残ってきたわけではない。そこで語られるオシラサマやザシキワラシ、カップもより広域的な伝承であり、遠野独自のものとは言えない。観光客はそれらが遠野に残っていることを期待し、遠野でそれらに出会えたことに満足するが、それらが遠野独自のもの、特に「遠野的な」ものとは意識しないに違いない。むしろ、自分たちの身近な地域、日本のほかの地域、特に都会ではもう失われてしまったものに遠野で出会ったという気持ちの方が強いのではないか。川森（1996、2001）は、このような気持ちに動機づけられた観光を、ノスタルジアの文脈において成立した「ふるさと観光」と捉え、遠野における観光状況をその典型的な事例

として注目した。そして、ケリー（Kelly, W.W.）の「ふるさとブームは、個人のふるさとを国家の心のふるさととして流用している」を引用しつつ、『遠野物語』をもとにしてイメージ化された遠野の文化は、遠野という特定の歴史・地理的空間をはなれて、一般的な『民話のふるさと』『日本のふるさと』というイメージとして消費されていくおそれをはらんでいる」と懸念している（川森、1996、p.157）。遠野の地域文化の現状は、ローカリズムとナショナリズムが相互に接合・浸透しやすい文脈において構築されてきたと言えるのである。

おわりに

本稿では、日本における地域文化の現代的文脈を観光化とそれがもたらした地域や文化要素の商品化、観光のまなざしの生成とその期待に応える地域表象の生産、文化の真正性への疑問と伝統の創造やフォークロリズムへの傾斜、そしてそれらを支えるローカリズムとナショナリズムの相互浸透として整理し、その文脈が遠野市における地域文化の生成過程と現状の解釈にきわめて有効であることを論じた。もとより、こうした文脈からの説明が現代日本の地域事例に普遍的に適用できると主張するつもりはない。しかし、高度経済成長期以降、観光化の強い影響の下で新たな街づくりや地域文化の再生・創造に積極的に取り組んできた多くの地域にきわめて適合的な視座であることは間違いないと思われる。最後にこうした観光化を起点とした一連の文脈下で生産・再生産された地域文化の現在の在り方をどのように評価すべきかという残された問題に言及して結語にかえたい。

文化には伝統の保持、型の保存といった価値観を強調する過去へのベクトルが内在し、そこから来る単純で古典的な見方の一つは、観光化が地域の文化、特に純粋な伝統文化を解体し、まったく別のものに変えてしまうというものである。たしかに観光が地域文化を資源として利用するとき、文化の要素は商品化され、「本来の」民俗文化のなかでそれらが有していた交換価値

に還元されないかけがえのなさを失うことになる。この場合、観光は「真正な」地域文化の破壊者として断罪されなければならない。しかし、問題はそれほど簡単ではない。その一つは森田（2003、p.95）も指摘するように、現在の消費社会において「本来の」民俗、伝承、伝統といった概念そのものが自明性を失い、矛盾を露呈していることによる。今日の日本においては伝統文化らしきものの断片はまだいたるところに観察され得るにしても、それらが統合されて一つの領域を形成している状況はとうに失われている。観光化の対極にあるものとして伝統文化や民俗文化を措定し、その側に立つてのみ観光の営為を告発することは論理的にも実践的にももはやあまり意味のないことと言わざるを得ない。もう一つの問題は、伝統や古い民俗を重んずる立場のもつ政治性である。太田（1993、p.388）は「文化についての語りがもつ政治性」の一つとして「純粋な文化を消え行くものと見なす語りは、対象社会に住む人々を文化のパッシヴな継承者と措定し、その人たちの行う文化の生産・創造を『非真正な（inauthentic）』行為としてネガティブに評価する」ことになると警告する。そして、「現在必要なのは、対象社会の人々の実践を文化の創造過程として捉え、その主体性を否定しない語り口」であると主張する。この主張の延長線上で川森（1996、2001）は、遠野ふるさと村の「語りベホール」での民話の語りの作られ方を題材に、遠野の人々の文化実践を外部から押し付けられたイメージを利用しつつ肯定的な自己を確立する抵抗の試みとして評価されるとした。しかし、こうした現状における文化の創造を肯定的に捉えるのみではナイーブに過ぎるであろう。まず一つには、地元の人々の主体性をどの程度他の要素から切り離して純粋に評価できるかという問題がある。この点に関し青木（2005、pp.7-9）は、観光地において文化を創り出している主体はひとり地域住民のみではなく、そこに観光政策や企業の経営戦略など政治や経済が分かち難いものとして入り込み、そこで無前提的に地元の文化創造を肯定してしまうことは開発側の戦略に無批判に加担する危険性をもつと批判する。また、近年の「まちづくり・むらおこし」の問題点を国の文化行政との関わりで論じた岩本（2003）は、それを表象し活用しようとする主体は外部であり、地元の住民は「外部のまなざしに合わ

せた伝統らしい振る舞いや思考が、あたかも自らの意思（である）かのように強いられていく」のが現状であるとする。もう一つの問題は、例えば住民の主体性が強く発揮され、地元の誇りやアイデンティティが回復されたかのように見えても、その底にはそれをナショナルな誇りに組み替える文化ナショナリズムのメカニズムが働くと、現代の地域文化を取り巻くより大きな状況がある（岩本、2003）。つまり、地元住民の主体的文化創造も、それがナショナルな価値に吸収されない限り、観光化の下では持続可能なものにならないということである。このように現状については肯定と批判の鋭く対立する2つの見解が表明されているが、おそらく、この両者のどちらかが一方的に正しいとするのは適切ではあるまい。いずれにしても、現代社会にあっては観光化による「文化の商品化」を前提としつつ、それに観光客や地元の人々がどのように実践的に対処しているかという「観光と文化」をめぐる諸過程（川森、2001、pp.69-70）を、より大きな政治や経済との絡みやそれらの制約を捨象することなく分析することが、もっとも重要な地域文化研究の実践的課題と捉えられなければならない。そして、そこで誰によるどのような種類の、誰にとってどのような価値のある文化生産が為されているかを複眼的かつ批判的に読み解くことが必要となる。それなくしての超越的立場からの一方的な肯定や批判は慎まなければならないと考える。

注

- 1) この論争は、安福恵美子（1993）により詳細に紹介・論評されている。
- 2) もっともホブズボウムとレンジャーが歴史や文化の解釈において全面的に構築主義的であるというわけではない。彼らは、「真実の伝統」とか「旧来の伝統」という概念を「創られた伝統」に対置しており、そこでは暗黙に（相対的にではあるが）本質的なものを想定しているように見える。
- 3) 通常解釈では、②もフォークロリズムとして捉えられよう。
- 4) 瀬川（1995）は、インドネシアの公園・博物館コンプレックス「うつく

しいインドネシア・ミニ公園」における地方文化の表象・展示が、エスニック・言語文化の多様性を塗りつぶして27の州という行政単位に収斂されている状況を報告している。日本においても、このような意図的・中央集権的操作とはやや質が異なるとしても、やはり地方文化の発現が行政単位に収斂する傾向がさまざまところで認められ、その意味で「平成の大合併」を経て誕生した新たな広域行政単位におけるローカリズム発露の状況が今後どのように変化していくのかが注目される。

- 5) なお、現代の地域文化との関係においても一つ考えなければならない要素はグローバリズムであろう。特に開発途上国の観光化と地域文化を考えると、グローバルな現象の拡がり抜きには議論できない。しかし、これは基本的に現代資本主義社会における国際的な力関係から来る必然的な現象であって、必ずしもイデオロギー・レベルで捉えられる性質のものではないということと、日本の当該事象においてはその影響がまだ鮮明に問題化されていないと考えられるため、本稿では捨象した。
- 6) 以下、全般に拙稿（「遠野の観光と街づくり」、『日本の地誌4 東北』、朝倉書店、2007年12月現在、校正中）、参照。
- 7) 観光客には宿泊客、日帰り客、通過客、さらには観光が副次的な目的の客などさまざまなタイプがあり、その入込み数を一つの数字で正確に述べることは困難であるが、遠野市観光関係部局の内部資料によると、道の駅「遠野風の丘」が開設された2000（平成12）年からは年による変動はあるものの年間143～168万人の人が何らかの形で遠野を訪れていることになる。ただし、このうち100万人弱が道の駅で数えた人数なので、遠野市を観光が主目的で訪れる人は現在最大で年間70万人程度と思われる。

文 献

- 青木隆浩（2005）：観光地における文化と自然の有用性—グリーン・ツーリズムを事例に一、『日本民俗学』243、1～32。

- 荒山正彦（1995）：文化のオーセンティシティと国立公園の成立—観光現象を対象とした人文地理学研究の課題—、『地理学評論』68A-12、792～810.
- アーリ、ジョン（加太宏邦訳）（1995）：『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』法政大学出版局（Urry, John: *The tourist gaze: leisure and travel in contemporary societies*, Saga Publications, London, 1990）
- 安藤直子（2001）：観光人類学におけるホスト側の「オーセンティシティ」の多様性について—岩手県盛岡市の「チャグチャグ馬コ」と「さんさ踊り」を事例として—、『民族学研究』66-3、344～365.
- 安藤直子（2002）：地方都市における観光化に伴う「祭礼群」の再編成—盛岡市の六つの祭礼の意味付けをめぐる葛藤とその解消—、『日本民俗学』231、1～31.
- 石川菜央（2004）：宇和島地方における闘牛の存続要因—伝統行事の担い手に注目して—、『地理学評論』77-14、957～976.
- 岩本通弥（2003）：フォークロリズムと文化ナショナリズム—現代日本の文化政策と連続性の希求—、『日本民俗学』236、172～188.
- 内田忠賢（1992）：都市と祭り—高知「よさこい祭り」へのアプローチ（1）—、『高知大学教育学部研究報告（第二部）』45、1～15.
- 内田忠賢（1994）：地域イベントの社会と空間—高知「よさこい祭り」へのアプローチ（2）—、『高知大学教育学部研究報告（第二部）』47、1～14.
- 内田忠賢（1999）：都市の新しい祭りと民俗学—高知「よさこい祭り」を手掛かりに—、『日本民俗学』220、33～42.
- 内田忠賢（2001/2002）：都市の伝統と現代—よさこい祭りの伝播—、『地理』46-12、90～95（前半）、同47-1、76～81（後半）.
- 内田順文（1989）：軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について、『地理学評論』62A-7、495～512.
- 大城直樹（1998）：現代沖縄の地域表象と言説状況、荒山正彦・大城直樹編

- 『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』古今書院、198～211.
- 太田好信（1990）：沖縄を舞台にした民俗学と観光—言説・表象・自己表象—、『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』3、103～118.
- 太田好信（1993）：文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造—、『民族学研究』57-4、383～410.
- 小島邦江（2003）：昭和初期に記述された郷土と手仕事—山陰の民藝運動と牛ノ戸窯を事例として—、「郷土」研究会編『郷土—表象と実践—』嵯峨野書院、46～66.
- 鎌田聖美（2004）：地域表象と地域イメージの形成—遠野を題材にした写真集の分析から—、岩手大学大学院人文社会科学研究科地域文化専攻修士論文（未出版）
- 川森博司（1996）：ノスタルジアと伝統文化の再構成、山下晋司編『観光人類学』新曜社、150～158.
- 川森博司（2001）：現代日本における観光と地域社会—ふるさと観光の担い手たち—、『民族学研究』66-1、68～86.
- 川森博司（2003）：伝統文化産業とフォークロリズム—岩手県遠野市の場合—、『日本民俗学』236、103～108.
- 金 明美（2004）：ナショナルな契機となるローカルなスポーツ活動—清水市におけるサッカーの普及過程—、『文化人類学』69-2、213～235.
- 小杉八朗（1978）：『東北城下町の研究』地人書房.
- シヴェルブシュ、W.（加藤二郎訳）（1982）：『鉄道旅行の歴史—19世紀における空間と時間の工業化—』法政大学出版局（Schivelbusch, W.: *Geschichte der Eisenbahnreise, Zur Industrialisierung von Raum und Zeit im 19. Jahrhundert*, Hanser Verlag, 1977）
- 瀬川真平（1995）：国民国家を見せる—「うつくしいインドネシア・ミニ公園」における図案・立地・読みの専有—、『人文地理』47-3、215～236.
- 高橋順一（1987）：捕鯨の町の町民アイデンティティとシンボルの使用について、『民族学研究』52-2、158～167.
- 成瀬 厚（1993）：商品としての街、代官山、『人文地理』45-6、618～633.

ブーアスティン、D.J. (星野郁美・後藤和彦訳) (1964) : 『幻影の時代—マスコミが製造する事実—』東京創元社 (後, 東京創元新社)

(Boorstin, D.J.: *The image; or, what happened to the American dream*, Atheneum, 1962; Weidenfeld & Nicolson, 1962)

福田珠己 (1996) : 赤瓦は何を語るか—沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動—、『地理学評論』69A-9、727~743.

ホブズボウム、E./レンジャー、T.編 (前川啓治・梶原景昭他訳) (1992) : 『創られた伝統』紀伊國屋書店 (Hobsbawm, E. and Ranger, T. eds.: *The invention of tradition*, Univ. of Cambridge Press, 1983)

森田真也 (2003) : フォークロリズムとツーリズム—民俗学における観光研究—、『日本民俗学』236、92~102.

八木康幸 (1994) : ふるさとの太鼓—長崎県における郷土芸能の創出と地域文化のゆくえ—、『人文地理』46-6、581~603.

安福恵美子 (1993) : 観光におけるオーセンティシティとは?—観光社会学的研究動向—、『聖徳学園女子短期大学紀要』21、99~115.

山下晋司 (1999) : 『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会.

吉見俊哉 (1996) : 観光の誕生—擬似イベント論を超えて—、山下晋司編『観光人類学』新曜社、24~34.

Cohen, Erik(1988): Authenticity and commoditization in tourism, *Annals of Tourism Research*, 15, pp.371-386.

MacCannell, Dean(1973): Staged authenticity: arrangements of social space in tourist settings, *American Journal of Sociology*, 79-3, pp.589-603.